

Q9 谷宿公園近くの共同墓地に新見家の墓がありますが、新見家と品濃町はどのような関係にあったのでしょうか？

A

- ・新見家の墓地には、丸い自然石で作った墓が二基立っています。右の墓は新見家の家祖である新見彦左衛門正勝の墓で、法名は「浄玄院殿釈祐邑居士」。左の墓は実は供養塔で、万延元（1860）年に日米



- 修好通商条約批准のために渡米した使節の正使・新見豊前守正興が父・新見伊賀守正勝を供養するために建立したものです。法名は「正学院殿従五位下伊賀守釈徳厚温融大居士」。元々、この墓と供養塔は白旗神社の西の山裾に立っており、当時は「殿墓」として住民に敬われていたということですが、区画整理事業のためにこの地に移転されたものです。
- ・新見家と品濃町との関係は、新見彦左衛門正勝に始まります。そこで、『寛政重修諸家譜』に拠って正勝の事績を見てみましょう。
- ・新見彦左衛門正勝は弘治 3（1557）年に三河国に生まれ、天正 2（1574）年、18 歳のときに遠江国において家康に仕えました。その後、天正 8 年には駿河国田中城攻めで軍功を挙げましたが、故あって翌 9 年に品濃村に籠居しています。「籠居」とは謹慎して自宅に閉じ籠ることをいいますが、刑罰として命じられることもあるといいます。何が「籠居」の理由かは何も書かれていませんが、兎も角、天正 9 年が、新見家と品濃町との関係の始まりです。天正 12 年には小牧長久手の戦いに従軍し、甲首三級を得た後、弓・鉄砲各 100 挺を受け取り、尾張国木幡城に籠り、戦後は品濃村に帰住しました。抜群の成績を挙げたわけです。天正 18 年には小田原城征伐に従軍し、関東入国を果たした家康から品濃村等 250 石を拝領しました。品濃村は、この時点で新見家の知行地となりました。つまり、正勝は品濃村の殿様となったわけです。慶長 19（1614）年には 58 歳の正勝は大坂の陣に出陣し御膳奉行を務め、その後、大阪御金奉行を務めましたが、寛永 17（1640）年に致仕し、品濃村に隠遁しました。ときに 84 歳でした。しかし、落ち着いたのも束の間、2 年後に 86 歳の生涯を終えました。
- ・品濃村内に北天院という、円覚寺を本山とする末寺がありますが、この寺所蔵の「御霊再興之由来」に正勝の墓のことが記されています。すなわち、正勝には墓石がなかったこと、印として松のみがあったこと、その松が遂に枯れてしまい、とうとう朽ち倒れてしまったこと、殿様から掘り返すよう仰せがあり 1 丈（約 3m）ばかり掘ったところ骨が出てきたことが書かれています。いうまでもない、正勝の骨です。そこで、時の殿様・正恒は、安永 2（1773）年 12 月に白旗神社の山裾に墓を建立したということです。

- ・「新見」は、はじめ「にいみ」と読みましたが、家康の仰せで「しんみ」と呼ぶようになったといひます。新見家の菩提寺は実は東京都中野区上高田にあり、「願正寺」といひます。正興の墓（法名「正興院殿釈閑山遊翁大居士」）と父・正路の墓はこの寺にあります。正興が今日まで続く日米関係の重要人物であったことから、大正 7（1918）年には駐日米国大使ローランド・モリスが、昭和 35（1960）年には駐日米国大使ダグラス・マッカーサー2世が詣でているそうです。

- ・次に、正興の父である新見伊賀守正路について説明しましょう。正興に比べ余り知られて



ていませんが、実は、以下に記すように大変な人物です。

- ・文政 12（1829）年に大坂町奉行として西町奉行に就任。その際に行ったのが安治川の浚渫です。安治川は、当時淀川の本流に当たり、淀川が運ぶ大量の土砂の浚渫は急務でした。洪水防止と市中への大型船の入港をし易くする目的で、1831年（天保2年）から約2年間、「天保の大川浚」と呼ばれる浚渫工事を行いました。延べ10万人以上の労働力がつぎ込まれたといひます。浚渫土砂を河口に積み上げてできたのが「天保山」（約20m）。



安治川入港の目印となりました。

- ・また、生活に苦しむ庶民を救済。訴訟の改正にも携わり、大塩平八郎とも親交があったといひます。
- ・天保 2（1831）年の辞任後は、江戸に入り、最後は水野忠邦が行った「天保の改革」により「御側御用取次」として将軍・徳川家慶に仕え、老中との取次等を担いました。御側御用取次は御側衆と違って宿直せず、毎日登城しました。したがって、住まいは、この地図（尾張屋版江戸切絵図 嘉永 2（1849）年）の「田安門」近くの小笠原加賀守辺りにあったといひます。また、息子の正興は御側衆まで出世しましたが、住まいはこの地図の「9」のところでありました。今の住所でいうと千代田区飯田橋2-18 辺りです。